わたしの修習時代

紀尾井町：1948－70　湯島：1971－93　和光：1994－

52期（1998/平成10年）

最後の２年修習

会員　古椎 庸文（52 期）

私は２年修習の最後の年で、比較的余裕のある修習であったように思う。1998年４月に入所してから既に25年も経過しているのであまり覚えていないが、勉強以外で印象に残っていることを書いてみたい。

私は、自宅から司法研修所まで２時間近くかかったが、前期は自宅から和光まで通った。修習の初日、クラス連絡委員を決めるとき、最初は誰も手を挙げなかったので、遠くから通うので躊躇があったが、思い切って手を挙げた。その仕事をする中で、教官や他のクラスの連絡委員とも親しくなることができ、いい財産ができたように思う。最近でも何年か前のことになるが、地方の裁判所の担当裁判官が弁護士任官の方で、他のクラス連絡委員だった知り合いの会派の出身だと分かったので、その裁判官の人となりを聞いたりしている。また、前期修習のとき、懇親会の席で民弁教官の隣に座ったら、依頼者との距離の取り方など、いろいろと話していただいたこともよく覚えている。

私は横浜修習だった。弁護修習のとき、修習担当の方の事務所を訪問して記録を見せていただいたことがあり、「これは絶対勝たなければならない事件だ」と聞いていた事件が、その後の裁判修習のときの指導裁判官の担当であり、心証を聞いたところ、「難しい」と言われ、弁護士の考え方を裁判官に伝えることの難しさを痛感した。また、年末の御用納めの日、配属された部の懇親会があり、温かく接していただいた部総括の方が鞄をご自分の席の足下に置き、懇親会の間、ひとときたりとも席から離れることのないのを見て、多分、記録が入っていたのだろう、記録の扱い方という基本を教えられた（当時は記録の持ち帰りが今ほど厳しくなかったのかも知れない）。また、裁判修習のときの懇親会で書記官の方から、「弁護士は手続きを知らない。よく勉強してほしい」と言われ、書記官の方からは厳しい目で見られているのだということがよく分かった。

検察修習では司法解剖に立ち会ったが、後で、司法解剖というつらい仕事を担当してくださる方が事実上その方だけだと聞いて、その献身ぶりに感動した。また、パトカーに同乗させていただいていたとき、警察無線で強盗事件が発生したとの連絡が入り、急遽、そのまま現場に急行することになり（もちろん、途中で降りた）、車内の緊張感が激変したことは鮮烈な印象であり、警察官の方の任務の厳しさを実感した。

弁護修習では、非常に温かく迎えていただき、感謝の言葉もない。横浜弁護士会（当時）小田原支部の懇親会に出席されていた方の事務所に就職した同じ横浜修習の友人がいるが、小田原で破産を申し立てたところ、書記官から「管財人になってくれる弁護士を知らないか」と聞かれ、その友人を推薦したら管財人に選任された。今とは事情が相当違うと思うが、修習時代の人間関係がいかに自分の財産となるかは、修習生の方にはお伝えしておきたいと思う。

残念なのは、激務のためだろう、亡くなった友人が何人かいることである。横浜修習のときに何度か二人で飲みに行き、遅くなって、誘われて彼の自宅（実家）に泊めてもらったことがある友人が、独立後、朝、事務所で亡くなっていたのが発見されている。今でも、彼の実家の近くを通ると彼の笑顔を思い出す。彼らの冥福を心より祈りつつこの稿を終わりにすることにしたい。